

イエスだけがおられた**ルカ9:28～36 / 李正雨師**

先週の水曜日のことです。教会で説教準備をしていましたが、うちの長男から電話が来ました。そして、「今作った焼き立てのパンがある、食べない？」と聞いてきました。先週の水曜日は、長男のパン教室の体験がある日でした。それで「食べるよ」と答えたら、ママと一緒にパンを持ってきました。そして自分が作ったパンをどや顔で渡しなが、パンがどのように作られるか、自分が何のパンを作ったかなどを一生懸命説明してくれました。弟とも分けて食べると言っている長男の姿を見ながら、本当に良い体験をしたんだなと思いました。この体験を通して、長男はパンがどのように作られるか、基本的なことは分かったでしょう。

今日の福音書で、イエス様の弟子3人は特別な体験をします。この体験は一般的ではない、霊的なことでした。弟子たちは、イエス様の様子が変わったことと、変わったイエス様がモーセとエリヤと共に語り合っているところを見ました。これは弟子たちにとっては衝撃的なことでした。ペトロが「先生、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです」と言うほどでした。しかし、ペトロの願い通りにはならず、すぐすべての状況は終わりました。おそらくこのような体験は、3人の弟子であるペトロ、ヨハネ、ヤコブに大きな影響を与えたと思います。私たちも信仰生活をしながら、様々な体験をしています。黙想や祈りを通して、または、礼拝や交わりを通していろいろな体験をしています。人によって違うと思いますが、霊的で神秘的な体験をしている人もいます。私は特に霊的な人ではないので、今日の福音書のような神秘的な体験をしたことはありませんが、間違いなくこのような霊的な体験もあると思います。しかし、確かなことは、このような体験は信仰のすべてではないということです。すべての信仰的な体験には目的があり、理由があると思います。そしてこのような体験は、私たちがこの世から離れて生きるようにするのではなく、この世でイエス様に従って生きるようにする様々な体験の一つだと思います。

今日の福音書の始まりは、「この話をしてから」という言葉から始まります。28節の言葉です。「この話をしてから八日ほどたったとき、イエスは、ペトロ、ヨハネ、およびヤコブを連れて、祈るために山に登られた。」ここで「この話」というのは、神の国についてのことです。今日の福音書の前の節である27節で、イエス様は「ここに一緒にいる人々の中には、神の国を見るまでは決して死なない者がいる」と言われます。そしてイエス様は、この霊的で神秘的なことを弟子たちに見せられます。つまり、今日の福音書で起こったことは、神の国に関することだということです。弟子たちの霊的な体験だけではなく、神の国が求めていること、神様の御心がこの神秘的なことに現れているということです。

29節は、イエス様が祈っておられるうちに、イエス様の様子が変わったと語っています。そして30節では、変わったイエス様がモーセとエリヤと共に語り合っていたと書かれています。この変化と、モーセとエリヤが現れていることは何でしょうか。ここにいくつかのコメントがありますが、私は、これが既存のことからの変化を表すことだと思います。モーセとエリヤは、イスラエルを代表していた人々でした。彼らは、肉体的にも信仰的にも大変な時代のイスラエルを導いた人々でした。ところが、この二人が変わったイエス様と共にいます。そして、彼らはイエス様と共にイエス様が遂げようとしておられる最期について話します。今日の福音書31節の言葉です。「二人は栄光に包まれて現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた。」

モーセとエリヤは素晴らしいリーダーでしたが、彼らは古い人です。律法と啓示を中心にして民たちを導いていた人々です。ところで、そのような彼らがイエス様と共に、イエス様が遂げようとしておられる最期、

福音について話しています。イエス様の死は、律法を守るためのものではありませんでした。律法を完全に成し遂げるもの、律法を越えて、神様の愛を示すものでした。ですから、この三人の語り合いの場面は、単にイエス様のことは素晴らしいということを示すだけではありません。長い歴史の間に、神の民を導いてきたことが変わるということ、律法ではなく福音が民を導いてくれるということだと思えます。律法の時代ではなく、福音の新しい時代がイエス様の最期と共に民たちに与えられるのです。そしてイエス様は福音によってすべての人を導かれるのです。神様の国のことも同じでしょう。神の言葉を守るか守らないかによって区別されるのではなく、神の国は信仰によって私たちのところに臨むのです。これがモーセとエリヤがイエス様と共に、イエス様の最期について話した理由だと思えます。

しかし、イエス様と共にいた弟子たちは、このような状況がよく分からなかったと思えます。なぜなら、彼らはひどく眠かったこともあり、ペトロの答えもこの奇跡の目的とは離れていたからです。33節にはこう書かれています。「その二人がイエスから離れようとしたとき、ペトロがイエスに言った。『先生、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。』ペトロは、自分でも何を言っているのか、分からなかったのである。」弟子たちが体験として受け入れたのは、イエス様の最期、福音ではありませんでした。彼らは栄光に輝くイエス様と、律法の時代の代表者であったモーセとエリヤを見ただけです。それでペトロはイエス様に「先生、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです」と言ったのです。神秘的な体験の意味が分からなかったからでしょう。ペトロ自身も「自分でも何を言っているのか、分からなかった」と書かれています。そして、このような神秘的なことは長くは続きませんでした。モーセとエリヤは去り、雲が集まってきました。雲は彼らを覆いました。

イスラエルの中で雲は、伝統的に神様の臨在を象徴しています。モーセが神様から律法を受けたときも、雲が山を覆いました。ところが、イエス様がご自分の最期について話しておられた時も、雲が山の上にいる弟子たちを覆いました。そして、その雲の中から、「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」という言葉が聞こえました。このすべてのことが神様の御心とご計画だということでしょう。神様は、御子の変化を通して、モーセとエリヤを通して、雲を通して、福音の時代が始まることを示されたのです。すべてのことはイエス様と共に変わるのです。

36節にはこう書かれています。「その声がしたとき、そこにはイエスだけがおられた。」すべてのことは終わりました。様子が変わったイエス様も、モーセとエリヤも、雲も消え去りました。夢のようなことが終わり、現実に戻ったのです。そして弟子たちの前には、イエス様だけがおられました。私はこの場面を読んで黙想しながら、これが私たちの信仰生活ではないかと思いました。私たちの信仰生活の中では、多くのことが起こっています。毎週繰り返される信仰生活のようですが、その中で私たちはいろいろな体験をしています。霊的で神秘的な体験をしている人もいて、み言葉と交わりを通して自分の変化を体験している人もいます。いろいろなことによって教会からしばらく離れる時もあり、律法的に自分と隣人を判断する時もあります。逆に信仰が深まり、すべてのことに感謝し、小さなことに喜ぶ時もあります。このような状況の中で、私たちは変化していくと思えます。いろいろなことが積み重なって今の私たちになったように、今の私たちも、多くのことによって変わっていくでしょう。しかし、私たちが安心できるのは、いつも私たちの前にはイエス様がおられるということです。すべてのことが変わり、消え去り、終わっても、イエス様は私たちと共におられます。そして私たちを導いて神の国に導いてくださいます。そのために、イエス様はご自分の最期をモーセとエリヤと共に話されました。この福音の慰めが皆様と共にありますように。イエス様の福音だけが私たちを導いてくださいますように、主の御名によって祈ります。アーメン